

大学における学生支援体制の組織化に関する事例研究

—心的障がい傾向を有する学生へのアプローチに焦点化して—

二宮 加代子

1. 研究目的とその背景

(1) 目的

本研究は、大学におけるチームによる、学生の支援体制について着眼点を置き、人とのコミュニケーションにおいて、困難さを抱える心的障がい傾向にある学生の支援に注目した。先行事例をベンチマークの対象とし、いかなる総合的支援と専門的支援の連携・協働が展開されているのかについて、現状を明らかにするとともに、さらなる組織化、連携・協働を強化する上で重要な課題を明らかにすることがねらいである。というのも、学生支援体制の仕組みとして、学生ニーズに応じた3階層（「日常的学生支援」－窓口対応や学習指導等で日常的な助言－、「制度化された学生支援」－オフィスアワー、クラス担任制度等－、「専門的學生支援」－学生相談室、保健室等－）を担う部署や教職員、専門家（臨床心理士等）によるプロジェクトチームを作り、多面的な学生支援（チームアプローチ）を行い、支援結果の評価においても各階層独自で行うのではなく、3階層を通して行うことで、組織的な体制が作られ、学生支援体制が確立すると考えたからである。さらに、この学生ニーズに応じたチームアプローチによる学生支援体制の仕組みは、増えつつある心的障がい傾向の学生支援においても有効であると考えたからである。

(2) 背景

この背景として、2007年3月の独立行政法人日本学生支援機構が報告した『大学における学生相談体制の充実方策について－「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」－』において、総合的な学生支援のみならず、専門的

な学生支援の視点を強く打ち出して、改めて両者の関係について整理している。それによれば、「教育の一環としての学生支援・学生相談という理念に基づき、すべての教職員と学生相談の専門家であるカウンセラーとの連携・協働によって学生支援は達成される」と記されている。さらに、大学全体の学生支援を、「(1) 目的」で述べた3階層モデルを示しており、それぞれに主体の異なる3階層の学生支援体制を繋げることで、学生を中心に据えた包括的な学生支援体制が確立できると、示唆している。このように、入学した学生が卒業するまでの長期的視野に立って、個々の学生が大学環境にうまく適応していけるような総合的支援が必要であり、組織的かつ計画的な支援を行う体制作りが喫緊の課題となっている。これからの学生支援体制は、大学における日常的支援や制度化された支援、専門的支援の3階層を繋ぎ、それぞれの情報を共有した上で、各支援の特質を活かし、最も効果的な支援を学生へ提供することであると考えられる。

2. 研究の方法

第1章では、学生気質や大学の変容とリンクした学生支援体制の変遷を歴史的に整理し、3階層の連携の必要性を改めて確認した。第2章では、事例調査を行い、取組みや成果条件などについて整理することで要因を明らかにし、今後の課題を整理した。先行事例には学生支援GPに採択された、トータルコミュニケーション支援室を核とした、包括的な学生支援を展開している富山大学をとりあげた。その他、比較調査として学生数5,000

名以上の大規模大学と、学生数2,000名以下の小規模大学からそれぞれ2大学をとりあげ、5大学における学生支援体制について、比較要因分析をした。分析方法は、組織マネジメント要因の分析手法である「活性化要因の分析枠組み」を利用して、活性化要因の分析を「組織心理的要因」と「組織マネジメント要因」の両側面から行い、その特徴と共通する活性化要因を抽出し、整理した。第3章では、チームアプローチによる学生支援体制の有効性に着目し、心的障がい傾向にある学生に対して一定の効果があると考えた。この考えに基づき、初等中等教育機関における特別支援教育体制、高等教育の「ユニバーサル化」となっているアメリカにおける障がい学生への支援体制を確認し、日本の高等教育機関におけるチームアプローチによる学生支援体制の組織化についてまとめた。

3. 結論と今後の課題

(1) 調査結果とその結論

学生支援の3階層における第3層「専門的學生支援」では、発達障がいを抱える学生に見られるような、コミュニケーションの困難さを抱えた学生が増えていることから、他との連携による支援体制の必要性を感じた。「日常的學生支援」や「制度化された學生支援」においても、コミュニケーションの困難さを抱えた学生に対する支援に、限界を感じていた。このことから、図1に示すとおり、専門的學生支援を核としたチームアプローチ（連携・協働）による包括的學生支援の必要性に対する理解が得られた。

このチームアプローチによる学生支援体制を組織化するための共通の視点を次の8項目にまとめ、組織マネジメントを行うにあたっての課題を整理した。1) 多様な学生を受け入れていることを共通の基準を持って共通認識とする。2) マネジメントを専門とする部署を置き、役割や位置づ

けを明確にする。3) 大学全体の統一的な方針のもと、チームにおいて学生を包括的に支援する。4) 教職員の研修会や勉強会（FD,SD活動）を実施する。5) マネジメント部門への情報集約経路を確保する。6) 情報管理の徹底とその情報を活かし支援する。7) 大学全体に対する支援体制であると捉えるようにする。8) 大学における支援体制を学内外ともに積極的に発信する。

(2) 今後の課題

ユニバーサル化された日本の大学において、学生支援のあり方も転換期を迎えている。心的障がい傾向を有している・有してない、身体的な障がいがある・なしにかかわらず、すべての学生が大学に入学した目的を果たせるために行うべき支援とは何か、という視点に立って考えていかななくてはならない。発達障がいなど心的障がい傾向を有する学生対応は、社会的コミュニケーションを苦手とする学生すべてに通じるものであるということが言える。このことから、チームによる支援は特別な支援ではなく、誰もが対象となる可能性のある支援である。

このチームアプローチによる支援体制における今後の課題を、次の5項目にまとめる。1) 多様化する学生を把握し、「消極的な支援」から「積極的な支援」が必要となること。2) 支援を必要とする学生は日々状況が変化していく。そのためチーム内における学生情報をリアルタイムに近い状況で共有すること。3) マネジメント機能を持った専門部署や人を配置し、マネジメント機能の役割を与え、全学的に共通認識を徹底すること。4) 様々な支援を必要とする学生の増加が予測されることから、教職員のSDやFD活動、研修会等を行うこと。5) 学内だけのチーム支援から保証人、医療機関、地域、他大学などチーム範囲を広くし、効果的なアプローチを行うことである。引き続き、効果的なチームアプローチによる支援体制のあり方とその具体的な支援内容について、国内

における先行事例やアメリカやイギリスなど海外の高等教育機関における事例も含めながら丁寧に検証し、継続的に研究していく必要がある。

各層における協働・連携

専門的な学生支援によるトータルコーディネート

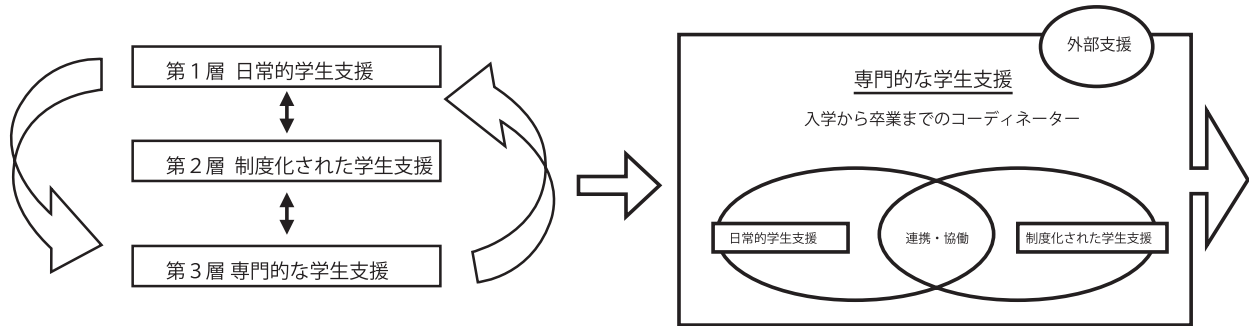


図1 各回想における連携・協働からトータルコーディネイトによる支援体制